

## 対 談

### 即興演奏とコミュニケーション

#### Improvisation and Communication

片岡 祐介\* 野村 誠\*\*

2001年7月7日(日)に行なわれた京都女子大学児童学科公開講座では、打楽器奏者の片岡祐介氏を講師に招き、対談「音楽療法と創造性」を行なった。片岡氏は、1997年から2000年まで、岐阜県音楽療法研究所の研究員をつとめ、ピアノ、ドラムセット、民族楽器、シンセサイザーなど様々な楽器を駆使し、現代音楽、フリージャズ、テクノ、ハウスなど様々な音楽語法を柔軟に組み合わせ、対象者と音楽的なコミュニケーションを成立させていく独自の手法を展開している。本稿では、公開講座での片岡氏との対談を掲載することにした(野村誠)。

**野村 誠**：今日ビデオを持って来てもらったんですけど…

**片岡祐介**：現場を見ていただくのが一番分かりやすいので、ビデオを持って来ました。知的障害と言われる人、大人の知的障害の人が入所して生活している施設で、週に一回、色々な音楽、音楽療法の活動をやってます。そのビデオです。

**野村**：片岡さんと電話で打ち合わせした時に、集団でのセッションの始まりから終わりまでの流れをビデオで紹介したいという話でしたんです。それは是非見せて欲しいんですけども、まず、一対一の関係で、どんなやりとりがあるのかを最初に見せてもらってから、複数の人の中で色々な出来事が起こっているビデオを見せてもらおうと思います。

**片岡**：最初に見ていただくのは、僕と某自閉症の男性が、ピアノの、即興で連弾をするというシーンです。

**野村**：はい。じゃ…

ビデオを見る。片岡氏と自閉症者(以下Aさんと記す)がピアノを弾いている。二人はピアノの鍵盤を連打したり、横に滑らせたりしている。お互い瞬時に相手の演奏を真似しているように見える。

**野村**：急に、どっちかが一本指になったら一本指になってたり、片岡さんがグリッサンドをしたら、相手の方もグリッサンドを真似したりとか、色々あると思うんで、ビデオを見ながら、どういうことをしているのかコメントしていただきたいと思うんですけども。

**片岡**：はい、今の続きあたりからやってみます。今まで見ていただいた部分は、細かい色々な真似しあったりってことが起きてるんですけど、わりと僕が模索してるんですよ。どういふことやるのが一番しっくりくるかな、っていうのを。

**野村**：今までの急に片岡さんがこう滑らしたら、滑らしたとか、その辺のことは説明しなくていいですか？

**片岡**：まあ、そういうようなことが、どんどん、もっと分かりやすく起きます。じゃあ、解説していきましょう。

\* 打楽器奏者・元岐阜県音楽療法研究所研究員  
Yusuke Kataoka

\*\* 京都女子大学家政学部講師(児童表現学)  
Makoto Nomura

## 1 縦の動きと横の動き

ビデオでは、自閉症者のAさんが、高音部の同じ場所を連打(手は、上→下→上→下→、という縦の反復運動)を続ける。一方片岡氏は、鍵盤を叩きながら低音部から高音部に素早く移動していく。つまり一気に左から右へ横の動きをする。そして、Aさんのすぐ側まで来たら、手を高く持ち上げて、そこから思いきり鍵盤を叩く。これは、縦の動き。片岡氏は、この「左→右」という横の動きと「上→下」という縦の動きを、交互に続ける。Aさんは、片岡の横の動きの時には、演奏を止め、縦の動きの時には、自分も同じタイミングで縦の動きをするようになる。

**片岡：**今、彼が、「きゃん、きゃん、きゃんきゃん」(縦の動き)ってやっていると、僕は少し休んでたわけですね、どうしようかなあと思って。で、それまではわりと「きゃんきゃんきゃん」っていうのに合わせて、伴奏のようなことをやってたんだけど、展開を変えたくなくなりましたね。  
それで、なにを思ったか、この「きゃんきゃん」(縦の動き)とちょっと違う感じの、「こるこるこるこる」(横の動き)って上がってくる、彼が縦に動いてるとすれば、僕のが横に動く、そういう音を、入れてみたんです。したら、彼がみごとに、反応してくれました。

その後、ビデオで、片岡氏が横の動きから、すぐに縦の動きに移らずに、横の動きの後、手を高くあげた状態で、少し(1~2秒)間隔を開けてから、縦の動きをする。Aさんは、そのタイミングを合わせようとするが、なかなかフェイントにあって合わせられない。このビデオの様子を見て、会場からは笑いが起こる。

**片岡：**で、間をちょっとあけてみました。

ビデオのつづき。片岡氏がペダルを踏んで音を響かせると、Aさんは縦の動きを止めて、鍵盤を横に滑らせるグリッサンドの演奏を始めた。

**片岡：**そしたら彼がグリッサンドしてきて、それで僕は真似したんですよ。

**野村：**えーと、今のところで、「ばららららららあつ、ばーん」っていう動きをしてたところで、その動きの最後の音をペダルで響かせたんですね、片岡さんが。で、響かせたことで、その響きを楽しもう、という気持ちが生じたのか。

**片岡：**そうとも言える。

**野村：**そこで、「がーん」(ペダルで響く)ってやって、「ぼろろろろん」(左→右→左→右→という横の反復)っていう動きが始まった場面…

**片岡：**そうですね、とにかく、「だらららららっ」(左→右)、「だっ」(上→下)っていう遊びになったわけです。で、彼が「きゃんきゃん」ってやってたのを、そのとき僕が「だらららららっ」てやってる間、演奏を止めて(待っていて)、(同時に)「だん！」ってやる、そうなのがよく面白くて、彼が待ってる間をもっと延ばしたいと思ったんです、音楽的にも。「じゃかじゃかじゃかじゃかっ(低音から高音への高速アルペジオ)+(間)+じゃんっ(高音部のクラスター)」、それをまあ、楽しんでたわけです。それをひとしきりやった後に、「じゃかじゃかじゃかじゃか、じゃん」って、切れる音が、一発太鼓みたいな「がーん！」それを、ちょっと悪戯ごっこみたいに、ペダルを踏んだら、「じゃかじゃかじゃかじゃかっ、きゅーん」って延びたわけですよ、音が。そうすると、次は、ちょっと同じ繰り返しにはならないだろうなっていうのがあって、ちょっと見てみましょうか。

## 2 ペダルを踏んで、曲調が変化

ビデオ

**片岡：**(見ながら)ここですね。(ペダルで音を響かせたら)彼がグリッサンドしたんです。彼がね、最初にグリッサンドをやったんですけど、そのうち何故か、この横の動きが凄く面白くなってきたんですよ。で、実際には鍵盤を鳴らしてない、鍵盤の上を…

**野村：**鍵盤の上を擦っている動き！

片岡：擦っているだけ、微妙に「かしかしかし」って、音がするんですよ。それが面白くて僕も真似して、ペダルは少し響かせて、今までの音が「ほわ～ん」と響いてるうえに、「かしかしかしかしかし」っていう音を、一緒に鳴らしたり、しました。

ビデオ、めくるめくグリッサンド

片岡：そういうことが、やりたくなっただけですね。要するに、グリッサンドだけで行ったり帰ったりしてるっていうのは、すぐに飽きてくるわけですよ。音的には面白いんですけど、まあ、わりと分かり切ってるわけですよ。「があああ～ん」って行って上がってきて、で、なにかリズムカルな伴奏を入れたいと思って。で、そうすると、やっぱり3拍子だろうって思ったんです。こう、「ワン、ツー、ワン、ツー」という往復運動じゃなくって、「いち、にっ、さん、いち、にっ、さん」という円環運動をやってみました。

ビデオ

片岡：さっきと同じようなのが、出てきました。まあなんか、第一主題が戻ってきたっていうか（笑）。

野村：どうして、元のパターン（左→右+間+上→下）に戻ったんですか。

片岡：いや、全然わかんないんですよ。

野村：やっぱり、「どんちゃ～ん」っていう3拍子系の動きから速く2拍子に「ずんちゃんずんちゃん」に移行してきたので。

片岡：恐らくそうです。だから、彼はいわゆる自閉症っていう障害で、人間同士のコミュニケーションっていうのが苦手なんですよ。演奏していると自分のことにはまってしまうことが多いわけですけど、やっぱり「ずんちゃ～ん、ずんちゃ～ん」（ゆるやかなワルツ）から「ぎゃぎゃぎゃぎゃ」（速い2拍子のリズム連打）ってきいたら、相当違いますからね。そこでハッとしたんでしょうね。殆ど反射的だと思いますね。なんかね、あたかもこの、「じゃ

かじゃかじゃかじゃか（左→右）+間+ぎゃ（上→下）」っていう遊びを普段からやってるみたいだけど、そうじゃないんです。

### 3 最初のセッションの頃

野村：これは、このとき初めて？

片岡：初めてなんです。初めてにも関わらず、2回目でも、すぐに再現できている。でも「さっきの、やつだな」って思ったよりは、もう殆ど反射的な

野村：この、ピアノと一緒に即興演奏するっていうのは、以前からやってることなんですかね？

片岡：そうですね。まあ、ピアノとは限らないんです。色々楽器、お箏とか、太鼓とか。ピアノも、まあ初めてではないですね。

野村：そうすると、初めての時から、コミュニケーションはこんなにスムーズにいったのか、どんな感じなんですかね。

片岡：そうですね、初めてのときは、もう少し「ぼつりぼつり」と音を出して、で、僕も「ぼつりぼつり」と、音をだして、微妙にコミュニケーションがあるような、ないような、っていうのが最初でした。やっぱり返してるうちに、やりとりっていうのが起きてくるって、ことです。

ビデオで、続きを見る。

### 4 ぴったり合わせずに微妙にリズムをずらす

片岡：今なにをやったかって言うと、「がらがらがら」って、「バーン」ってやってたんだけど、僕としては、んー、またか！ っていう気分もあったんで、その「がらがらがら」じゃなくって、「ぎよっぎよっぎよっぎよっ」っていうのを、やってみたんですよ。だから、それは、「がらがらがらっ」、「ぴょーん」、にちょっと近い、上がってくるのは一緒だけど、ちょっと変えてる。そうすると彼も、あれなんだらう？ どうすんだらうかなっていう、ちょっと2人のさぐり合いみたいな状況が続

いてるような気がしますね。

ビデオ

**片岡**：それで、「きよつきよつきよつきよつ」てやってるうちに、彼がなんか、そのテンポについてきたんですね。それでその、「きゃっきゃっきゃっ」っていう音が、ピアノの高い方の音で、「きゃんきゃんきゃんっ」て鳴ってる感じが非常に明るい、ノリのいい感じがしたんで、ブルースというかブギウギみたいな、ベースパターンを僕が左手で弾いてみました。

ビデオ

**片岡**：それで、僕にとって工夫しているところは、「きゃんきゃんきゃんきゃんきゃんきゃんきゃん」って、最初は彼の「きゃんきゃんきゃん」になんとか、誘発されて、そのテンポが出てきたんですけど、ただ、彼が「きゃっきゃっきゃっ」と叩くテンポに、ピッタリは合わせてないんですね。あの、「きゃっきゃっきゃっきゃっ」、「じゃーかじゃーかじゃーかじゃーか」

**野村**：「きゃっきゃっきゃっきゃっ」て言ってますからどうぞ。「きゃっきゃっきゃっ…」

「きゃっきゃっきゃっ…」といい続ける野村に合わせて、片岡氏は、最初「きゃっきゃっ」に合わせて、次第に微妙にずれてくるように「じゃーかじゃーか…」と続ける。

**片岡**：こういう感じですね。そうするとどうなるかって言うと、あの、1回1回きゃっきゃっきゃっを全部ピッタリ合わせるとね、それは結構カタイんですね、ノリとして。それが、「でいんかでいんかでいんかでいんか」ってやってるときに、「うきゃーうきゃ、うきゃきゃんきゃん、うきゃーきゃんきゃん、きゃんきゃん」って、ジャズなんかでそういう風にずらす奏法っていうのがありますよね。ちょっと、ひとりでやってみるか、(ピアノを弾いてみる) こんなことをやってるわけでは

よ。これが、(ピアノが「きゃっきゃっきゃっきゃっ」となる) ぴったりあってる状態ですね。これだとね、あんまり面白くないと思うんです。(今度はずらして弾いてみる) あおっていくようなノリが出ますよね。「きゃっきゃっ」じゃなくて、「うきゃん、うきゃん、うきゃーん、きゃきゃきゃ、んきゃ、んきゃん」っていう。ま、そういう効果になるのを期待して、彼としては普通に均等にやってるのかもしれないけど、敢えてずらしてみたいんです。

ビデオ

## 5 トーキングドラム

**野村**：はい、ありがとうございます。一対一のセッションはこれ以外にも、以前見せていただいたことがあって、今ピアノの連弾だったんですけども、ドラムセットとピアノでやったり、トーキングドラムっていうアフリカの太鼓を…。あ、実演してもらった方が。

**片岡**：はい。これ、トーキングドラムっていう、アフリカで通信用に使われてるタイコなんですね。なんか、言葉の代わりに「こんこん」ってやると通じる。まあ僕は通信はできませんけど。

(たたきまくる)

**野村**：こうしめることによって皮の張りが変わるんで音程が変わるんですね。それで、片岡さんが自分で叩いたり、一緒にセッションしてる相手の人の前に差し出したりしながら、相手が叩く時に、音程を変えてみたりする。で、また自分が離れて行って叩いてみる。また近付いて叩いてみる。で、そのうち今度は、離れて行って、差し出すんじゃなくて、違うところにぼんって出す。相手が寄ってきたり、まあ、言葉でのコミュニケーションじゃないんですけど、音、動き、身体の動きとでのコミュニケーションで、それがすごく、うまくいっているなあ、と思ったので、ちょっと、それも、映像を見せてください。

ビデオ。会場に笑い。

**片岡**：はい、そういうことです。これ、もう一年位セッションした後なんですよ。初めてやった頃はね、もう、とにかく凄い緊張で、「ん、ん、んん〜」とやって、「ぼん！」って叩くんですよ。で、それが聞いてて日本の音楽ってというか、「いよお〜っ」とか、のどを締め付けるような声だして、「ぼん！」って打つがありますよね。それに見えたんですね。それで、ちょっとやってみます。その

**野村**：じゃあ、僕やります。「ん、ん、んんん〜っぼん！」(タイコを打つ)

**片岡**：そうそう、そうです。

(「んん〜」、にかぶらせて、「ぼんぼん、ぼぼぼぼん」と叩く。一同、納得)

**片岡**：ってやってるうちに、今度は僕がこういってしまうわけですね。

やしるべえになって、だんだんどこかへ行ってしまふ。

## 6 一体一

**野村**：ええ、はい。片岡さんは、音楽家として育って来た中で、たまたま音楽療法研究所の研究員なられたので、もともと心理学のフィールドじゃなくって、心理学に基づく音楽療法ではなくて、あんまり実践されてない音楽家が取り組む音楽療法をやられてきた。今見せてもらった一対一でのセッションをされてみたいなんですけど、音楽療法の世界では、一対一で行うセッションが多いみたいですね。

**片岡**：特にその、自閉症の人のね。

**野村**：ええ、それで、僕がそれを聞いて思ったのは、例えばカウンセリングとか色々な心理療法を、音楽に応用してくって時に、ひとつの部屋で一対一で、っていうのが、ごく自然なアプローチだったのだろう、ということです。あと、自閉症の人は複雑な情報には混乱するので、一体一で行うのが適切だと言われてい

るらしいんです。ところが、片岡さんによると、どうもそうではない。一対一のセッションだけやってたんだけど、たまたま、複数になった時に、色々新しい反応が出てきた、というわけです。ちょっとその話を聞きたいんですけど。

**片岡**：はい。まあ、野村さんが言った通りですね、定説では、自閉症の人は、複雑な情報には混乱すると。例えば、えー、ワイパーの音がかチカチいってて、ラジオが鳴ってたりするともう、ちょっとわからなくなる、そういう、話は聞くんですよ。聞くんですけど、ある時、集団で…僕も、一対一でセッションやってたんですけど、ある時、集団でやらざるを得ない状況になって、待っててもらうのも何だし、みんなに楽器渡したりしてたら、なんか、非常に、音をよく聞いているし、反応しあって、混乱してパニック起こすって感じでもないんです。それどころか、非常に面白い音楽が生まれてるって気もして、で、それ以来、ま、わりと集団でやるのが好きになって。集団っていってもまあ、5〜6人くらいなんですけどね。えー、集団即興と言っているのかな、それぞれが好き勝手に音を出すという…。で、まあ、これから見ていただくビデオもそういう状況なんですけど、それはもう、かなり最近のもので、2週間前ですね。それから、もうひとつのポイントがありまして、始めた頃は、自閉症の人に、あなたこれやらない？ これやらない？ って、楽器を勧めたりしてたんですよ、でも、放っぽらかすのが面白いっていうことになって、放っぽらかすって言うとちょっと語弊があるんですけどね、要するに、まあ、自分がやりたい楽器のところへ行ってもらうことにしました。

**野村**：はい。

## 7 昼寝〜静寂〜敏感な耳

**片岡**：で、このセッションの前には、自閉症の人たちは外にいたんですよ。で、暑かった。

**野村**：なんか、散歩？

**片岡**：うん、その前、何かの活動で。それで、

暑かったんでしょうねえ。部屋に入ってすぐ音楽をやるっていうよりも、ちょっと座り込んで、「はあ〜っ」みたいな雰囲気だったんですよ。それで、電気消して、昼寝したい！とか思って、昼寝をしたんです。そしたら、彼等は非常に雰囲気をよく察してるんですよ。電気消して昼寝したら、ごろーんとしてしーんとするだけです。で、そういう状況から、始まったわけです。それで、しーんとなったんで、僕は嬉しくなって、こういう時こそ、僕のピアノを聞いてもらおう！で、小さな音で弾いたりとかね、まあ、そういう風に弾くところから始まる。じゃあ、まあ。

**野村：**はい。ビデオを見ながら、できるだけコメントをお願いします。

ビデオ

**片岡：**（見ながら）この人が、ピアノの低音を…、この人はねー、すごいんですよ。

**野村：**もうちょっと細かく説明もらえますか。

**片岡：**今、ピアノの低い音をぼんぼん、ってやってた人っていうのが、以前セッション初めた頃に、僕は、てっきり音楽に興味がないと思ってたんですね。僕の方も見ないし、喋りかけても僕が楽器弾いても、回る椅子を床のうえでくるくる回してたりしてるんですよ。それで、この人は興味ないかもしれないし、無理にそんなにやらせることもないしな〜、と思ってたら、ある時ね、僕が楽器を弾くのをやめたら、椅子を回すのやめたんですね。で、弾いたら、もっとくるくる回してるんですよ。それで、あー、そうか！と思って、聴くのが好きで、聴きながら、その椅子を回して、椅子のダンスを、楽しんでたんだな〜、ってことがわかったんです。で、それに気がついてから、彼のことをよく見ると、まあ、たまに音も出すんですけどね、非常にいい、いい間合いに、音を入れてくるんですよ。で、渋い表現。だから、昼寝して、このみんなが暗くなった時に、ピアノの低音を、「ごご、ご」って押すなんて、なかなかねイキだと思うんですよ。うん。またやられた！っていう感じ

で。

**野村：**なるほど。

ビデオ

**片岡：**（見ながら）彼はみんなの様子見ながら弾いてる。4〜5分経っています。おもちゃの（ポータブル）キーボードが、どこからともなく鳴ってます。誰かが弾いてるんですよ。まあ、僕の、このチャンスにリサイタルやろうっていうのは、半分、冗談なんだけど、半分は本当なんです。みんなが静かにはしてるんですけど、「うう〜ん」って声出す人がいたり、「がさがさがさ」って音が聞こえてきたり、それが非常に面白いと思ったんですよ。で、たまに、ピアノの和音を「ぼーん」と弾いて、余韻が小さく消えていきますよね。そういう音を出すことで、カサカサした音や、声とかも、音楽として混じりあうようにしようと、思ったわけですね。それで、非常に耳が敏感な状態になっていく、そういうようなことも、ねらいとしては、あるわけです。

ビデオ

**片岡：**（見ながら）この声とピアノ、セットで。この彼なんかも、非常に鑑賞してる感じなんです。よく聴いてますね。（声とピアノが）合うでしょう。

**野村：**（見ながら）鳥の鳴き声みたいです。

## 8 電気がつく〜音楽が動き始める

**片岡：**（見ながら）癒し系！このあたりで電気つきます。この時点で電気が半分、つきました。先程のピアノ、「ゴーン」と弾いていた人が、ペットボトルを、演奏し始めたんです。ペットボトルに、切り込みを入れてあって（ペットボトルに切り込みを入れた手作り楽器「バリンビン」の実演）ビリビリって、ノイジーな音がします。で、先程の「ききききききい〜」って声出した人が、ドラムセットに行ったら、タイコを「ぼこぼこ」って、叩き出し

たんですよ。で、それに誘発されたかのよう  
に、僕が手に持ってたペットボトルを、今、  
ピアノで「ゴンゴン」ってやってた人が取り上  
げて、セッションが始まったんです。

ビデオ

**片岡：**（見ながら）で、このタイコとペットボ  
トルの音を聴いてたら、僕はギターを弾きた  
くなくて、今、取りに行きました。もうね、  
彼と僕の相性はばっちりです。今彼が、  
歯に「かしかしかし」ってあてたのと、僕がギ  
ターを「かしかしかし」ってやったのが、ほぼ  
同時だったんですよ。だから、この音楽の  
中でそういう音が欲しい、という気分を共有  
していたわけです。

**野村：**なぜここでこういう気分になってるの  
か、ってことは、今始めてビデオで見せても  
らってるので、分からないんですけど…。

**片岡：**そうですね、編集されてますからねえ。

**野村：**その時の気分として、なんか「かしか  
し」ってやりたい気分、二人が同時になっ  
たっていう、ちょっとそこをもう一回。「かし  
かし」のところを…。

ビデオ

**片岡：**（見ながら）そしたら、この人が、ギター  
に向かってきました。やってみたくなくなっ  
たんですよ。少しにぎやかになってきましたね。  
どうですか、これ。音楽に聞こえますか。

**野村：**あの一、ビデオってこともあると思うん  
ですけど、さっきの対一の、関係性が、  
かなりクリアーに、見えるんですよ。平面  
に入るから。で、これ5人くらいいますよね。  
そうすると、かなり空間的に離れてたり、近  
くにいたり、っていうので、ビデオに全体の感  
じがあまり映ってないので、これは、やりと  
りがあるのか、ないのか、っていうことが、  
ちょっと、分かるようで分からない。実際、  
その現場にいた感じとして、どんな感じ、ま  
だやりとりが起こる前の感じなのか、これは  
結構起りかけているのか、その辺ちょっと、

コメントして欲しいんですけど。

**片岡：**はい。微妙に起りかけてる、と感じて  
ます。

**野村：**じゃ、さっきの連弾でいっても、最初の、  
やりかけてる時の、感じ？

**片岡：**そうかもしれないですね。ただ、さっき  
の連弾と違うのは、やっぱり昼寝から入った、  
ということで、音に対して非常に敏感になっ  
てる、ところから始まっているんで、「かしゃ  
かしゃかしゃん」って音とか「ビリビリビ  
リッ」て音が非常に意味深に聞こえる状況に  
なっていると思います。だから、相互のコ  
ミュニケーションはどの程度か、っていうの  
は分からないんですけど、出ている音に対  
して非常にセンシティブな状況が起きている、  
と今のところ、解釈してます。

ビデオ

**片岡：**（見ながら）ドラムを、入れました。ま  
あ、さっき言ったみたいにちょっと微妙にし  
過ぎたんで、少し気楽に音出せるような状況  
にしてみました。たまに入るギターがいいん  
ですよ。別の人ピアノに自主的に向かって  
いって、ピアノを始めたり、踊り始めたり  
しています。

## 9 一瞬の真剣な表情

**片岡：**あのね、この人、喜んでるんですけど、  
カメラ映されてるし、なんか、見られてるし、  
喜んでるっていうのがあるんですけどね。僕  
そのことよりもですね、今、ちょっと、ピ  
アノを「きゃっきゃっ」と弾いた時に、さ  
っきのジャズじゃないですけど、「カーンカー  
ンカッ」って聞こえるような、面白い僕との  
からみがあったな、と思ってですね。それで  
ね、音楽が一瞬いいな、って思った時に、  
彼女の顔がね、真剣味があるんですよ。ち  
ょっと、戻しましょう。ほんの、瞬間なん  
ですけどね。

ビデオ

(見ながら) はい。あのー、まあ、ね、僕は音楽療法って言いながら、人のことを、こうなって欲しいという風にあんまり思わないことにしてるんですけどね。僕が思うに、この人やっぱりちょっと気が散ってるわけですよ。他人が見てるし、わーって喜んだりとか。でのことよりも、この人の真剣になったこの瞬間、これをね、僕はもっとね、長い時間やりたいなあ、という希望が、この先あるんですね。でもおそらく一対一でやったり、あんまりギャラリーがない時とかに、発揮することがあり得るだろうと、僕は推測しています。

## 質疑応答

### 1 その人らしさを尊重、関係性を築く

**質問者1**：西村と申します。音楽療法とか、全く分野外の人間なんですけども、先程、療法と言いながら、あまりこうなって欲しいとか、こうしようとか思わないんです、って言うておられましたよね。その辺についてもう少し、何でそういう風に思われるのか、…

**片岡**：単純に言えば、自分だったら、他人にそう思われるのが嫌だな、っていうことですね。あの、例えば僕は、すごいひどい方向オンチなんですけどね、あなたは方向オンチだから、それ治った方がいいから、って接近する人に対してはちょっと僕は、嫌だな、っていうことがあるっていうのが、一つですね。こうなったらいいだろうとか思うこと自体で、その人の可能性を限定するような気もするんですよ。で、それに、別に今のままでいいじゃないか、っていう気もあるし。それで、まあ、もし何か、望むこととかいうか、思うことがあるとすれば、やっぱり、その人が一番その人らしい状態にいることがいいんだろうな、と。

**野村**：ちょっと僕もいいですか？ 片岡さんのことを、彼が音楽療法研究所の研究員になる前から知っていて、で、彼は、さっきも言ったように、音楽家としての活動をして、たまたま音楽療法研究所から要請があって働くこ

とになったんですね。それで、音楽療法ということ、もともとしていたわけではないので、音楽家が、音楽療法の活動をしたらどうなるか、っていうような話で、始まったと思うんです。彼がやろうとしていることを見ていると、基本的に、コミュニケーションを、音でどうやってとるか、っていうことを追求してるような感じに見えます。ですから、コミュニケーションをとる、っていうのは、自分は変わらず相手だけ変わらせるとか、相手が変わらなくて自分だけ変わるとかいうことじゃなくて、二人の間の関係をどうよくするか、ということです。その場合にやりとりなので、相手がこうくるんだったら、こうするっていうように、片岡さんの広い音楽的なボキャブラリー、ドラムからピアノまで、クラシックからロック、演歌まで、を駆使して、どうやって、関係性を築いていくか、っていうのを、やっておられるんだと思うんですよ。それで、いわゆる療法っていうことがどういう概念なのかは僕はちょっとあまり、よく分からないんですけども、あの、これはまあ、音楽療法って、僕は呼んでいいんじゃないかな、っていう風に思ってるんですけども…、よろしいでしょうか。

**質問者1**：はい。

### 2 箏のセッション

**質問者2**：一番最初に見た、二人で、ピアノでなさってた時に、あの、ピアノのほかにお箏とかタイコで、された、っておっしゃっておいりましたけれども、お箏っていうの、とても、興味があるんですけども、どのようなお箏の状態、例えば箏柱をとるとか、つけてるとか、それで、随分音の広がりも変わってくると思うんですけど、どのような状態で、セッションをされているんですか。

**野村**：例えば、お箏だったら通常だったら、平調子といって、こういう（ピアノで弾いてみる）ような順番に、柱を並べるんですけども。

**片岡**：低い順番から、上がっていく、要するに、弦がだんだん、短くなってくるわけです。そ

ういうことが多いんですけど、僕の場合はですね、この、箏柱をこんな風に、ばらばらにするんですよ。そうすると、(ピアノを弾く)ってなるわけです(音程が上がったり下がったりする)。それで、で、こっちに僕、こっちにもう一人っていう風に、向かいあって、擦り合う、っていうこともあります。

**野村：**僕も以前、見学させてもらった時に見させてもらったんですけど、お箏って、爪をつけるじゃないですか、指に。爪はつけてなかったですよ。

**片岡：**つけない、つけないです。

**野村：**それで、指でつまびく、っていうこともあって、あと、割り箸とか、細いバチのようなものを、弦の上に、「ころろろーん、ころろろーん」と打樂器的に弦を叩いていく、っていうようなこともありました。

**片岡：**ま、それぐらいで、いいですか？ チューニングは、さっきの平調子に限らず、色々…

**野村：**そうですね。ただ、僕が見させてもらったのだと、まあ、ぎざぎざに適当に並べると、響きが、適当にぐちゃぐちゃ、って並べると、そのまあ、音階の間の音、微分音がいっぱい出てきて、ばーんと弾いたとき気持ちよくないので、それを、なんとなく、この音もうちょっと下げるといい和音になるな、ってところをみ見つけながら、やっている、ようです。

### 3 真剣になった瞬間

**質問者1：**じゃあ、また。さっきの、すごい喜んでた女の子が、真剣になった瞬間を、もっと延ばしてみたい、っておっしゃられてましたね。その心を、聞かせていただきたい。

**片岡：**あー、それはですねえ、やっぱり、あの音楽のあの瞬間がよかったんで、あれをもう少し長いこと味わいたいなっていう、一番の動機はそれですね。

**野村：**で、これから、例えばそれを、やってみよう、と思ってるわけですか？

**片岡：**そうですねえ、わざわざチャンスを作ってまでかどうかわからないけど、おそらく状

況が起きると思うんで、やると思いますね。例えば、たまに、まだ一対一でやる時があるんですけど、そういうときに、彼女に来てもらうと。彼女最近参加したんですよ、この活動に。だから、まあ、ちょっと、一対一でつきあってみる、ってことは、考えてます。

### 4 複数でもパニックはない

**野村：**ちょっと僕も質問させてもらいたいと思うんですけど、ま、さっき集団でやった方が、一対一よりも非常に面白い、っていう話があったんですね。一つ目の質問は、さっき最初に、たくさんになると混乱する、という話があったんですけど、混乱する、っていうことはなかったのか、っていうことと、それとも一つは、複数になったときに、関係性っていうのは、片岡さんとそれぞれの人の関係性以外に、片岡さん以外のセッションに参加されてる方々同士の、色々なやりとりがあるのか、っていう、その2点を、ちょっと聞いてみたいんですけども。

**片岡：**はい。1点目、なんでしたっけ？

**野村：**1点目は、あの、情報が多いと混乱する、っていうことで、パニックになる、っていう…。

**片岡：**ああ、それね、不思議なんだけど、今まで一度もないんですよ。うん、でも、他人のセッションのビデオで、パニックになってるところとか見たことあるんですけどね。僕の時は、今のところ一度もそういうことに遭遇したことがなくて…。うーん、やっぱりなんか、まあ、他人のこと悪く言うのはあれだけど、見たことあるんですよ、パニックになってる状況を。それはやっぱり、嫌がってるのに執拗にね、歌いなさい！ 歌いなさい！ って、いつまでもこう、やってる時に、もうねえ、あー、やめてくれ〜！ あ〜！ ってこうなってる、っていうことはあるんで、そういうことは、さすがに僕はしてないと思うんですよ。で、それと、情報量が多くていうのも…

**野村：**人数が多い状態でも、パニックには全然

なっていない？

**片岡：**うーん、なっていないですねえ。音の情報量がどうこう、っていうよりも、僕の想像するにやっぱりその場所の居心地みたいなことかなあ、なんか、好きにできていいんだな、って思えれば別に、パニックする理由もないんじゃないかな、っていう風には思ってますけどね。あと音に関しても、ある種の方向性があるっていうか、全部がまったく無意味な信号に聞こえる状態か、なにか音の方向性があるかどうか、ってことも、関係してるかなあ、って推測してます。

**野村：**1点目、パニックにはならない、ってことですね。

**片岡：**はい。

## 5 参加者同志の関係性

**野村：**二つ目の質問なんですけども…。

**片岡：**何でしたっけ…。

**野村：**二つ目の質問は、一対一の時は片岡さんとその人とのやりとりで、成立しているんですけども、複数の人がたくさんいて、片岡さん、片岡さんとそれぞれの人、って、片岡さんがギターでヴィーンとやったときにもうひとりのひとが歯で、ビリビリ、ってやったとか、ドラムとピアノでやってうわ～となった、とかいう、その関係は見えたんなんですけども、そこで、片岡さんじゃない参加者の人たち同志の、横のコミュニケーションっていうか、やりとりは、どんな風に存在してるのか、存在してないのか、をちょっと聞きたいんですけど。

**片岡：**はい。えーと、あんまりないようにも思えますね。で、微妙にあります。うん、どうなんでしょうねえ、あんまりないんじゃないかな。でも、音を聴いてると、反応してるように聞こえる、ということですねえ。それは僕にとってはしてる、っていうことにもなるんです。やっぱり、僕も人見知りする人間なんで、それぞれが距離をくつつかない、でも一緒にやってる、っていうのがあるから、ムードとしては好きなんですよね。で、僕が好き

なムードというのがやっぱり移ってくるのかな、っていう、感じですよ。で、まあ、その質問とはちょっとまた別のことで言うと、一対一でやってる時、っていうのは、ある意味すごく密にできるわけですよ。で、密なんだけど、うざい、との、ギリギリなところ、っていうんですかねえ、なにかとちょっかい出してくるわけですからね、ちょっと、一人で弾かせてよ！ っていうことも、あり得るだろうな、っていう感じがあって、それで、今日のビデオで面白かったのは、僕もああいう風に、昼寝して、やってて、今日はもうやる人いなくてもいいかなー、非常に落ち着いて音を聴いてるんなら、活動としてはすごくいい活動だし、まあ、別に、みんなやらなくてもいいし、ずーっと寝てて、誰かがやってるの聴いててもいいかな、って思ってたんですね。思ってたんですけど、そう思ってやってたら、後でビデオ見ると、大体、みんな何かやってるんですよ。のそのそ、って出てきて叩いたり、かと思ったら寝たりとかね。それは非常に、楽だな、って、やりたい時にやって聴いてたいときは聴いて、っていう…。そういう風に思ったんですね。はい。だから、どっちもいいとこ悪いとこ…。

**野村：**えーと、まあ、どっちもいいとこ悪いとこあって、えーと、まあ、多分その集団セッションの時には、あまりプレッシャーっていうか、一緒にやるぞ、っていう押し付けがなく、たくさんの中から、それぞれの人から出てきた、音っていうか、反応を、片岡さんが拾いながらやりとりをやって、また、他のことが起きたらやりとりをしていく、っていう形なんですよね。それ以外の人たち同志の関係っていうのが、これを続けていく上でどうなっていくのかっていうのは、非常に、注目っていうか、きっと、何かがあると思うんですよ。それでそれがどんな風に出てきて、どういうことが起こっていくのか、っていうのは、これからの研究課題っていうか。

**片岡：**そう、確かにその通り。ある二人の間を、僕は音によってとりもってる、って感じがありますね。ある音が、ある人が、「きらきら～」、ってやってる、ある人が、「ぼこっ」とやっ

てる。で、その2つだけだとあまりに違う、ってとこのを、ピアノか何かで、その、間に、何か音を入れることで、そういう音楽に全体として聞こえるような。だから、その2人をとりもってる、っていうようなことは、今、恐らくありますね。そういうことを繰り返すことによって、どうなるかな、っていうのは、確かにあると思いますね。

## 6 セッションを初めた時期

**質問者3**：今の集団セッションは、最近始められたとおっしゃってましたけれども、個人的に出会って、関係を作りだされて、ここまで来たと思うんですけど、だいたいその年月っていうのはどれくらいたってののか？

**片岡**：色んな方がいらっしゃるんですけど、最初にピアノこんこん、ってやってた人とか3人くらいが、3年間くらい、個人セッションをやってました。トーキングドラム、叩き合ったりとか。信頼関係っていうか、見知った仲になってるので、集団になったときにも非常に、やり易かったってことは、あるでしょうね。3年間個人セッションやってきた人たちよりも、新しい職員さんが、(セッションに)馴染めなくて苦労するようなんですよ。この即興でいいんだろうか、みたいなね。他の何年かやってる自閉症の人は、マイペースで「こーん」とかやったり、寝たりしてる、そういうことありますね。

## 7 日常生活の変化

**質問者4**：今のセッションの場では、すごく楽しそうだったり、っていうのは見えるんですけど、あの場以外の普段の生活で、セッションをすることによって、その方たちに変化が起こるっていうのは…。

**片岡**：あるかどうか？

**質問者4**：そうですね。

**片岡**：はい。あんまり知らないんです。職員さんから色々話を聞くときはあります。思いきりタイコを叩いた後に、あまり大声だして

暴れたりとか、そういうのはあんまりなくて、ストレス解消になってるんだねー、という話を聞くことありますけどね。でも、今のところ、僕は日常生活にどう響くかを、全く考えてないですね。うーん、どう思います？

**野村**：え？ はい。それはまた別の研究テーマになると思うんですけども。研究所時代に、例えば、普段の生活がどういう風に変ったか、的的な研究、例えばそういう調査っていうのはされてない？

**片岡**：僕はしてないですね。何故かというと、それも分かるんですけどね。そういう、音楽療法の本とか見ると、そういうのはあるんですよ。落ち着いて座ってられるようにするために、っていうのは。でも、それはしつぱ的な要素が入ってくるような気が凄くするんです。本当にその人に必要なことなのか。必要だとしても、僕は興味がわきにくい…っていう感じがあって。例えば僕がさっき、ピアノをもう少し長いこと弾いて欲しい、っていうのがあったけども、それはある意味別のこと、長く集中することができれば、例えばフランス料理屋さんに行っても、ずっと座ることができる、っていうのはあるわけです。あるにはあると思います。だけどそのことよりも、やっぱり、あのピアノをもう少し聞きたいっていう動機の方が多くて、日常生活は、何かいいことに繋がっていけば、嬉しいけども、あんまりそこまでもっていく気は、今のところ僕にはないっていうか…。

**野村**：それは別の研究者の人と組まれて、そういう研究に興味のある方と組んでやったらいいと思うんですけど、実際、変化は、あるだろうな、と予想はされます。ただし、さっきの関係性の話になると思うんですけども、その人が変わってる、っていうのもあると思うんですけども、例えばですね、その、この人がこうやって集中して、ピアノを弾いて、コミュニケーションができてるという状態を、他の人が見て知っているっていうことだけで、状況が変わると思うんですよ。あ、この人はこういうことに対して、こういうやりとりがあるんだ、とか、こんなに繊細なんだ、と、

周囲が気付くだけで。そのことによって、他の人の反応が変わると思います。人って、違う顔を見せるんですよね。例えば、僕ここで、女子大生に教えているじゃないですか。女子大生は先生の前で顔が変わるんですよ。相手の先生によって、違う表情を見せるわけです。真面目そうな先生にだったら、真面目そうな顔するし、ほんわかした先生だったら、ほんわかした顔するし。だから、人って、そういうもんだと思うんですよね。この人はこういう人だ、って決めつけると、決めつけられた顔しかできなくなる。それはもう人間全般に言えると思います。片岡さんのセッションの中で、色々な側面が現れる。それを片岡さん以外の人に、知ってもらうことによって、すごくその人の見え方が変わってくるんじゃないかな、っていう気は…。

**片岡**：そうそうそう。去年、音楽療法の担当じゃない職員さん、(セッションを)見たことのない職員さんに、たまたま、セッションのビデオを見せたんですよね。そうしたら、〇〇さん、こんな、にこにこ笑って、こんなこともできて、これお母さんに見せてあげたいな、とか、言ってるんですよ。それを見て、あ、職員さんがそう見るってことは、その職員さんにとっての、「その人」観が、変わるだろうから、どんどん見せた方がいい、と、思ったことがありました。

**野村**：時間になりましたので、ここで質問を打ち切らせていただきます。本日の、講師の片岡祐介さんです。どうもありがとうございました。(拍手)

**野村**：昨日、今日と、京都女子大学児童学科の公開講座ということで、昨日は、カウンセリングを、大辻先生と石野先生でやられまして、今日は、午前の部はコンサートと、午後の音楽療法の講演会を行いました。児童学科っていうのは僕も2年目で、まだよく知らないと言えば、無責任なんですけど、児童文化、児童心理、保健、教育、表現と、多領域に渡ったことを、学んでいく学科なんです。それで、生活の中の色々な要素を統合していくような学問だ、ってことが、ちょっとずつ分かってきたって感じで、この音楽療法を、今回入れさせてもらったんですけど、音楽とかコミュニケーションとか、これから片岡さんとか、是非やって欲しいのは、心理学の人と組んで、やっていくような仕事とか、看護病院の人と共同研究を始められる、って聞いたんですけども、音楽とか音楽療法っていうフィールドが、色々な分野の人と絡み合いながら、新しいことを見つけていく、っていうようなことを、どんどんやっていこうと思いますので、よろしく、お願いします。どうもありがとうございました。(笑、拍手)